

## 体育科・保健体育科における学び続ける子ども

平成20年度から取り組み始めた本学校園の幼・小・中一貫教育プログラム開発において、体育科・保健体育科では、子どもの「やってみよう」という思いから始まる授業づくりを構想してきた。そして、子ども達が「やってみよう」という思いから出発し、「どうやったらよりよくできそうか」という課題解決のための思考を経て、「やってみようこうだった」と自分自身のからだで検証していく授業展開を各領域で実践してきた。

子ども達が主体的に「どうやったらよりよくできそうか」という問いを持ち、試行錯誤しながらその答を追究できるためには、各領域の本質や特性に応じて導き出される学習課題と子ども達の「やってみよう」「できるようにになりたい」「もっとうまくできるようにになりたい」という思いをすり合わせていくことが求められる。そして、子ども達の「やってみよう」「できるようにになりたい」「もっとうまくできるようにになりたい」という思いがスパイラル的に連続し学び続けることができるためには、教師のはたらきかけが不可欠である。

平成26年度の研究紀要に「次年度以降は、『視覚的な理解と運動感覚的な理解の間の往還による学習方法の設定』を教科の共通の基盤としつつ、『領域に特有の技能構造の抽出によるめあての設定』から導かれる授業方法と授業過程の研究を、今年度の成果の上に積み上げていくこととなると考える。」と書かせていただいた。平成27年度の授業研究ではこれらの研究課題がどのように具体化されたのであろうか。

今年度は、これまで継続的に取り組んできた「空間認識力の形成」をボール運動領域のネット型教材において実践し、小学校第5学年のハンドテニスと中学校第1学年のバレーボールの授業に取り組んだ。ネット型ボール運動は、ネットを挟んで攻守が相対しているため、自陣の中で相手チームに邪魔されることなく守備の動きと攻撃の動きを切り替えることができる。この特徴を活かして、ネット型ボール運動の授業では守備の動きから攻撃の動きへ切り替える瞬間のプレイをどのように組み立てるかに学習の焦点をあてることができる。

そこで、『領域に特有の技能構造の抽出によるめあての設定』としては、ハンドテニス、バレーボールとも共通して「守備の動きから攻撃の動きへ切り替える瞬間に、コート上の空いたところをみつけてボールを打ち込む」という領域に特有の技能構造をまず抽出し、ハンドテニスでは「チームで配球図を記録して、得点につながる返球について自分たちの考えを確かめよう」、バレーボールでは「攻撃データをもとに、得点しやすい攻撃方法を考え、ゲームで実践してみよう」というめあてが設定された。いずれも、「得点につながるためにはどこにボールを打ち込んだらいいか」という問いに対する答を思考させることが学習課題となる。

『視覚的な理解と運動感覚的な理解の間の往還による学習方法の設定』においては、思考の手がかりとなるツールとして、ハンドテニスでは「配球図」、バレーボールでは「攻撃データ」が設定された。いずれも、「配球図」や「攻撃データ」に記録された客観的な事実から子ども達がボール・人・コート上の位置関係の特徴をどのように読み取るか、読み取られた特徴から子ども達が得点につながる空間上の配球や自陣のメンバーのフォーメーションをどう意図的に組み立てることができるか、が学習課題となる。授業の構想段階では、このような学習課題を達成するために、「配球図」や「攻撃データ」をどのようにデザインし子どもたちの思考を導いたらいいか、どのようなタイミングでこれらの思考の手がかりを子ども達に合わせたらいいか、が検討された。

教師の願いは空間の使い方における戦術的知識を発見してほしいということにあった。これはネット型ゲーム一般に共通する基本的な戦術的知識でもある。しかし、子ども達の反応を予測する中で、子ども達は空間に着目するよりも人に着目するのではないかと、つまり、ボール操作が苦手な子や足が遅い子に向けてボールを打ち込みミスをおこすのではないかと懸念も生まれた。学び取ってほしい学習の本質と子ども達の得点したい・勝ちたいという気持ちや個々それぞれに探究したい事柄をどうすり合わせるかが検討された。そこで、教師から子ども達への発問の内容を、学び取ってほしい学習の本質へと焦点化するように絞り込み、子ども達からのふりかえりを慎重に整理して次の時間のめあてや発問につなげるよう、はたらきかけることとした。

そのために重要であったのは、「記録された事実から、どうやったらよりよくできそうかを読み取る」ための発問と、それに対する子ども達の答を集約して学習内容を共有させるまとめであった。時には発問によって子ども達の思考をゆきぶりながら、ふりかえりとまとめを丁寧に積み上げていくことによって、「どうやったらよりよくできそうか」という子ども達の学びをスパイラル的に連続させることが実現できたといえる。

一方で、子ども達が思い描くプレイを成立させるための運動技能をどう保障するかという課題も見出された。子ども達の運動経験の実態に対応しつつ思考と運動技能を統合させる教材の工夫が、今後とも求められよう。（共同研究者：初等教育開発講座，廣兼 志保・スポーツ教育講座，西村 寛，久保 研二）